サービスラーニングを振り返ってみて

社会福祉学部社会福祉学科 2 年　戸崎　大樹
活動先：NPO 法人　ふわり
クラス：村上　徹也　先生

1.　SL を通しての自分の成長と気づき

まだ 1 年のゼミ選択の際、特に将来やりたいことも決まっておらずどこを志望しようかとても迷った。そんな時、ゼミ紹介で SL の存在を知った。NPO の現場に直接足を運び、自らを通して社会的な福祉を学ぶというスタンスに面倒くさそうだが面白そうだという、単純な理由で SL のゼミを選択した。しかし、そういった単純な理由であるにしろ、やるからにはしっかりやろうという意思は持っていた。そこにははっきりとしたビジョンが見えたかといえばそんなことはなかった。模索の状態から私の SL 活動は始まった。

まず、私の選択した活動先「NPO 法人ふわり」は、コンサルタント事業で経営コンサルを主な活動内容としている。そして、理念として「どんな生きにくさを抱えていても住みたい場所で愛する人とずっとふつうの暮らし続けることができる街づくり」となっている。人間がごく普通に生きていくということの奥深さをひしひしと感じる理念である。

こういった私たちが何気なく暮らしている社会には、生きにくさというマイノリティの問題がある。NPO の活動に参加することによって、そういった現状をよりあからさまに感じる。福祉大生なので、そういった現状を耳にはする。だがしかし、実際の現場に足を運ぶということの意味の大きさが感じ取られただけでも収穫が大きいと思った。私の活動先の場合だと、地域の夏祭りに「NPO 法人ふわり」名義として出店するという内容だったので、実際にどういった面で生きづらい所を抱え、障害者がこの社会参加を全うできるか等の具体的な現場を見たわけではない。しかし、スタッフからの施設紹介の話や夏祭りを通してみて、周りの雰囲気から NPO の存在というものの定義を再確認させられた。

また、先に述べたすべてのことについて、展開から発信の域まで達することができたと思っている。初めは、何も思い浮かべることができなかった構想だったが、活動をしていくうちに地域でとりまく福祉というものに目を向けることができるようになったと思った。NPO の存在というものにもよくわからない状態からスタートして、そんなに特別な存在ではなくて身近なものに感じてきた。そして、最終的には活動報告会という場で、仲間と一緒に活動内容をまとめて SL の概要について理解することができたと思った。何より、村上クラスでは皆で協力して作り上げることの大切さを重点に置いている。そういった面でも、多少出来上がった報告内容が到達点に届かなかったとしても、到達するまでの過程を要点において結果一人ひとりの理解の度が促進できたのではないか。

意識の問題だけではなく、活動当初はあまり自分から動く事が出来なかった。内容自体は、夏祭りの露店を担当するという割と単純なものだった。しかし、あまり指示がない状況で当日に予定をいろいろ調整する中、活動に対して消極的な部分も自分の中で見受けられた。そんな中で 6 日間の活動をしていくと、次第に自分から動けるようになったと自覚したところも多いと思っている。このように行動面においても、成長した部分が見受けられたと思う。

2.　活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

地域活動や社会活動には、どういうものがあるのか当初は何も想像が出来なかった。それは何故かと問えば、そもそも地域と関わる機会がないからなのだと思った。地元ならともかく、愛知県の知多半島に今は下宿している生活で、慣れ親しんだ街というわけでない。何もが初めての街であり、土地柄もよく知らずに 1 年をのんべんだらりと過ごしてきた。それを今回この SL の活動によって、見透かされた気分にさせられた。ここ知多半島には NPO の事業所が活気付いていて、いかに素晴らしい地域活動の場所であるということを。

ふわりでの活動で、地域活動には人と人とのつながりが大事だということを率直に思った。夏祭りに参加するということで、ヨーヨーや金魚すくいなどの各ブースを担当させられていた。ここでの活動は行動力での話になってくる。そして、祭り終わりの打ち上げでその事を痛感させられる。そこには、公民館の人などをはじめ、地域の人らと私たちの「特定非営利活動法人　ふわり」が一緒になっている風景がある。ただ単に酒や料理に舌鼓を打っているのではなく、そこで繋がりというものが見えてきた。いわば、コミュニケーションを図る場なのである。そのコミュニケーションこそが人との繋がりになっていく。

ふわりは、地域、社会から見ればどちらかといえば少数派といえる団体である。住民からの理解もなかなか得にくいことだってある。そういった少数派である NPO が受け入れられていくためには、地域とのつながりというものが必須である条件だと思っている。その機会というものが、なかなか内側から発信しにくいからこそ、祭りというツールを使う。それも祭りの開催は独自で行うものでなく、地域が執り行うものにこちらから参加するというケースをとっている。独自でイベントごとを開いても、それに参加するのは身内などが多いという。これでは内から外へと発信することができない。しかし、この地域の祭りに参加するというケースはどうだろうか。祭りに来るのは地域の人々である。そこで初めて、NPO の存在を知ってもらうこともあるそうだ。更に、その祭りの会場の地域を取り仕切る人たちとも距離が縮まる訳である。それによっては、周囲に認知づける効果的なものである。

地域という面でいうと、こういったエピソードもある。私が SL の活動として事前訪問に行った際に、まずこんなことを言われた。「理念とは法人の考え方・ミッションです。活動の中で、様々な地域の方々と接します。障害のある方の事を理解してくれている地域の方はマイノリティ（少数派）です。」という理念を理解しなければならなかった。おそらく私の誤った行動によって、障害のある人の印象や地域生活が変わるということがあるということが十分にありえるということであろう。地域との繋がりが大事であるという面があるが、それ相応の姿で繋がる必要があるということに対しても念を押された。こういった繋がりを大事にするという表現でまとめるのは、なんとも安易な感じがするのだが、うえで述べたようなことを言い表すべくこのようにしめたいと思う。